HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	岡本綺堂「人狼」論 : キリシタンとその信仰をめぐって
Author(s)	西岡, 沙都美
Citation	研究論集, 19, 37 (右)-52 (右)
Issue Date	2019-12-20
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.19.r37
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/79817
Type	departmental bulletin paper
File Information	19_rjgshhs_19_p037-052_r.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/rjgshhs.19.r 37

岡本綺堂「人狼」論：キリシタンとその信仰をめぐって

西岡　沙都美

要　旨

本論文は、岡本綺堂「人狼」における切支丹の諸相について明らかにするものである。フレデリック・マリヤットの「人狼」と岡本綺堂の「人狼」の差異を検討し、岡本の「人狼」においてはおいよが「マリヤ像」と重ねられている側面があることを指摘していく。

これまでのキリスト教文学研究においては、切支丹を扱っている歴史小説についてほとんど触れられてこなかった。しかし、日本のキリスト教文学においては切支丹というテーマは重要なものとして扱われてきた。同様の要素を扱うものとして、歴史小説をキリスト教文学の系譜と関連させて論じていく必要があると考える。

大正から明治にかけて歴史小説を多く執筆した作家の一人として岡本綺堂を挙げることができる。岡本の書いた「人狼」は、人狼という怪異と切支丹の信仰を結び付けた作品として捉えられる。岡本の「人狼」はイギリスの作家であるフレデリック・マリヤットの「人狼」を参照して書かれたものである。しかし、マリヤットの「人狼」と岡本の「人狼」にを比べて見ると、差異が多くある。二つの「人狼」の大きな差違として、1、人狼の変身の様子、2、異界との距離の二つを挙げた。この二つの差違から、フレデリックの「人狼」は怪異と日常がほとんど分断されたものとして書かれていたのに対し、岡本の「人狼」は怪異と日常の場が曖昧化されていることが指摘できる。

また、本作においてはキリスト教が重要なテーマとなっており、これに対する信仰を持とうとするおいよは、怪異と日常・神的存在と人間・キリスト教に対する信仰と不信など、様々な領域を行き来する存在として捉えられる。こうした二つの領域を行き来する存在として作品においてもう一つ提示されているものが「マリヤ像」である。おいよは作品において「マリヤ像」と重ねられ、その表象は切支丹信仰の懐疑を示すものと考えることができるのである。

1、はじめに

本論文は、岡本綺堂「人狼」における切支丹の諸相について明らかにするものである。フレデリック・マリヤットの「人狼」と岡本綺堂の「人狼」を比較し、二つの作品において異界の諸相が異なっていることを明らかにする。その上で、岡本綺堂の「人狼」においては、おいよがマリアと重ねられている側面があることを指摘していくことを目的とする。

これまでの研究において、キリスト教文学研究はキリスト教と深いかかわりを持つ作家の作品を中心として行われてきた。キリスト教は、自身の信仰との関わりを意識する・しないに関わらず多くの作家に共有されていたものであるが、そうした作品は無視されて来た。

キリスト教に強い影響を受けた作家の作品において重視されているのは、近代日本においてキリスト教は如何に受容されているのか、という点であり、日本という風土にキリスト教は馴染みえるのかという問いとなって作品に表出していると考えられる。

一方で、これらの文学が歴史小説としての一面も持っているという点も忘れてはいけないことだろう。芥川龍之介の「奉教人の死」や遠藤周作の「沈黙」においては、切支丹が描かれており、日本のキリスト教学が切支丹とのつながりをもっていることが伺える。

昭和戦前期、時代小説を中心として活動していた作家として国枝史郎、岡本綺堂、野村胡堂らの名をあげることができる。これらの作品においては、切支丹が登場し、作品のなかで重要な位置をしめることも珍しい事ではない。しかし、これまでの研究においては、こうしたキリスト教文学と時代小説との係わりはほとんど研究されてこなかった。時代小説との係わりについて述べていくことで、キリスト教文学に新たな視座が開けると考える。

平井照敏は「近代南蛮文学の出発」において、キリシタンに対する興味が近代の始めにおこり、明治末年以降にキリシタン文学が描かれるようになったと述べている。平井は、南蛮文学を「キリシタン関連をテーマにした、特に宗教的・思想的宣伝意図を持っていない創作文学」とし、その起こりが明治四十年代に発表された、木下杢太郎・北原白秋からであることを指摘している[1]。また、尾崎秀樹は、大衆文学は昭和二年より順次刊行された『現代大衆文学全集』によって強固なものとして認識され始めたことを指摘し、その作品群には時代小説があると述べる。『現代大衆文学全集』に収められた作家としては江戸川乱歩、白井喬二、小酒井不木、長谷川信、岡本綺堂、国枝史郎、吉川英治などがあげられる。全ての作家でないにしてもその多くが時代小説を執筆しており、その中にはキリシタンが登場する作品が少なくない。岡本綺堂、吉川英治、野村胡堂、国枝史郎らの作品にキリシタンと関連する事物が存在する。こうした大衆文学におけるキリシタンの表象は、明治以降からの南蛮文学との関わりが皆無ではないと考えられる。しかし、芥川龍之介や北原白秋、木下杢太郎らにおいて研究されてきた「キリシタンもの」や南蛮文学に比べ、大衆文学、時代文学はほとんど触れられてこな

かったものである。こうした現状を踏まえ、大衆小説作家による南蛮文学を、キリスト教文学という側面から捉えなおす必要があると考える。

岡本綺堂は、一八七二年に東京芝高輪に生まれた。幼少期には父から漢詩を、叔父と公使館留学生から英語を学んだという。府立一中を卒業した後、『東京日日新聞』の記者となり、劇評、小説、戯曲などを発表している。処女戯曲「紫宸殿」は九六年に『新歌舞伎新報』に発表されたが、あまり評判はよくないものであったという。しかし一九一一年に発表された「愁禅師物語」が大好評を博して以降、「鳥辺山心中」や「番町皿屋敷」など、新歌舞伎に属する作品を次々に発表していくこととなる。岡本の代表作である『半七捕物帳』シリーズは一九一七年から発表された。その他江戸時代の風俗文化に関わる随筆、研究など、様々な分野で活躍した。三〇年には月刊誌『舞台』を発刊し、そこでの執筆が盛んとなる。今回扱う「人狼」も一九三一年三月に『舞台』に掲載された作品である。また、この作品は同年五月に上演されている。

東雅也は「英国の海洋小説作家フレデリック・マリヤット（一七九二―一八四八）の長篇『幽霊船』の一挿話で、人狼小説の古典的名作としてアンソロジーに抄出されることも多い「人狼」（別題「ハルツ山の人狼」）にインスピレーションを得て執筆されたとおぼしき異色作」とした上で、この作品について次のように評している。

ホルトガル（ポルトガルの古称）の宣教師をからめることによって、巧みに異教的雰囲気を演出している。愛する肉親が知らぬ間に異形のものと化す悲哀と恐怖という主題は、原典にも共通しているが、同時に「玉藻の前」などとも一脈通ずる綺堂伝奇の特色であることを見のがしてはなるまい。上演の際には、市川松蔦演じる化猫風の狼女が評判になったという。[2]

フレデリック・マリヤットの作品には、宣教師などが登場せず「怪奇」という側面に焦点が当てられているが、この作品では宗教的なものが強く打ち出されていることと言えるだろう。また、ここで指摘されている「化猫風」に演じられた狼女という風貌にも注目しておきたい。東は岡本の作品に「悲哀と恐怖」という要素を見出すが、紀田純一郎は岡本綺堂の文学について「その作風は怪奇小説というよりも怪談に属する」ことを指摘する。「人物の性格や心裡を描くよりも、怪異の趣向と古風な雰囲気を、説話の枠内で描く」ものであり、人間関係にはあまり着目していないという点について注目するのである[3]。

こうした点から見ると、この小説において重視されているのは、宗教的な対立、あるいは人狼という怪異であると考えられるだろう。岡本が参考にしたと考えられるフレデリック・マリヤットの「人狼」と比較しつつ、本作品の考察を行っていきたい。

2、フレデリック・マリヤットとの比較

フレデリック・マリヤットの「人狼」は、もともと『The Phantom Ship』（「『幽霊船』」）という長篇小説の一章にあたるものである。しかし、この挿話があまりに印象的であるためか、現在まで長篇小説からこの挿話のみが取り出されて訳されることが多くあった。平井呈一は「この作品は「人狼」を主題にした小説としては、いちばん古い、オーソドックスなもの」であると述べ、人狼を扱った小説群の「もっとも正統的な、記念すべき原典」であるとする[4]。

この作品は戦後に発刊された『世界大ロマン全集』に収められるまで翻訳はされていない。岡本綺堂は、昭和四年に『世界怪談名作集』の翻訳に携わっており、こうした機会にマリヤットの「人狼」を読んだと考えられる。平井は、「前期の恐怖作家がゴチック小説の流儀を踏襲して、いろいろくふうした怪しい不気味な条件と環境をとりそろえて、自然と人生の上に超自然的恐怖を組み立てていった」と述べる[5]。マリヤットの作品は、前期の恐怖作家の分類として認識できるだろう。つまり、ハルツ山という空間、白い狼、得体の知れない父娘など、様々な怪奇的な要素を揃え、その上で怪異について語るのである。

フレデリック・マリヤットの「人狼」の筋は、次のようなものである。

船乗りであるフィリップは同じく船乗りであるクランツに子供の頃の話を尋ねる。クランツはそれに応じて自身の過去を話し始める。クランツの父は裕福な農夫であったが、不貞を犯した妻と領主を殺したことで、クランツと兄、妹の三人の子供を連れ異国へ逃げることとなる。父と三人の子供が行きついたのはハルツ山の山小屋で、父は猟を行い生計を立てていた。或る日、白狼を見つけたクランツの父がそれを追っていくが狼を見失い、かわりに馬に乗った父娘に出会う。二人の身の上に共感を覚えたクランツの父は、娘は結婚をすることを決める。司祭がいないため、娘の父が述べる「ハルツ山の精霊」への誓いを結婚の誓いとし、娘の父は小屋を去った。新しい母は、生肉をこっそり食べたり、クランツの妹をいじめたりと不審な様子が目立った。クランツの兄と妹は狼に殺され、夜中にクランツは新しい母が妹の死骸を食らっている姿を見た。それを見たクランツの父は母を撃ち殺した。死んだ母の姿は白狼に変化しており、クランツの父は白狼に騙されたことを悟る。次の日、白狼の父が飛び込んできて、クランツの父に対して結婚の時に行った誓いが生きのこった一家に呪いとなって降りかかるだろうと嘲りながら消えた。クランツの父は高熱にうなされながら亡くなり、自身もその呪いを受けるだろうことをつげ、クランツの話は終わる。

ある島に上陸したフィリップとクランツは水辺で水浴びをする。その後に、クランツが「自分がいつ死ぬか分からないため、遺品を受け取ってほしい」と告げ、フィリップは受け取ろうとする。その時、森の奥から虎がクランツに襲い掛かり、クランツは森の奥に咥え去られてしまう。残されたフィリップは、ハルツ山の精霊の呪い

が完遂されたことを悟った。

以上が、マリヤットの「人狼」のあらすじであるが、岡本の作品とは「人狼」という要素のみを残してほとんど別のものとなっていることが分かる。マリヤットの「人狼」と岡本の「人狼」は舞台、設定などが大きく変えられている。むしろ、女性が人狼となり、夫に撃ち殺されるという点が共通点として見出されるくらいである。では、岡本の作品においてマリヤットの人狼はどのように変容しているのか。ここでは、注目すべき事として変身の様相、異界の位相という二点について言及していきたい。

3、人狼の変身

岡本の「人狼」では、おいよの最後は次のように語られる。

（二人はいよ〳〵不安を感じたるが如く、正吉は窓より表を窺う。下のかたの秋草をかき分けておいよ転び出で、窓の外に倒れる。）

正吉　あ、狼……。（窓より覗く。）いえ、人です、人です。人が倒れています。

（正吉はあわてゝ表へ出てゆく。モウロも続いて出づ。）

正吉　（月あかりに透し見て叫ぶ。）おいよさんです、おいよさんです。

モウロ　おゝ、おいよさん……。兎も角も内へ入れませう。

（モウロと正吉はおいよをかき上げて、家の内に運び入れ、炉の前へ後ろ向きに横える。）[6]

この場面では、その前まで人狼となって人を襲っていたおいよが狼の姿から人の姿を取り戻していることが伺える。一方、マリヤットの「人狼」では、母の遺体について次のように述べられる。

倒れているのは、母の死骸とばかり思っていたのに、妹のなきがらの上に、のしかかるように横たわっているのは、白く大きな牝狼だった。

『この畜生だ！』父は叫んだ。『この白狼めは、おれを山中におびきよせたやつだ。――いまはじめてわかった。おれは、ハルツ山の霊に魅入られたのだ』[7]

ここにおいて指摘できるのは、マリヤットの「人狼」においては人であったものが、狼の姿を取り戻しているという点である。つまり、岡本においては人が狼へと変容するのに対し、マリヤットの作品では狼が人に変容しているのである。これは、死によって正体があらわになっていると考えられる。小野泰博は「人狼が傷つきあるいは殺されると、人間の姿が自然にもどってくることである。これは多くのヨーロッパの例にみられるし、逆の形では、中国の狐や犬迷信の例にもみられるところである」と述べる[8]。人狼は、マリヤッ

トの作品が出る以前からヨーロッパを中心に語り継がれて来た。こうした伝承のなかでは、死ぬことで元の姿を取り戻すということが多く語られていたのである。マリヤットの「人狼」では、ハルツ山の精霊とその娘という語られ方をして居ることからも、母の正体は白狼であったことが伺える。二つの人狼の正体が何であったのか、という点においてこの二つの作品の決定的な違いが指摘できる。

また、マリヤットの「人狼」においては、白狼とハルツ山の霊が重なるものとして示されている。白狼は自覚的に変身を繰り返す存在であり、それは精霊というキリスト教とは異なる宗教との繋がりによるものである。これは、西洋の狼に対する理解と不分離なものではない。

ジル・ラガッシュはキリスト教における狼について次のように述べる。

> 初期のキリスト教者は、福音伝道と改宗を進める過程で、オオカミから守らねばならない罪のない子ヒツジという、単純で強いイメージをしばしば用いた。オオカミはまだはっきりと悪魔であると名指しされてはいなかったが、敵としてすでに名指しされていた。
>
> キリスト教の中世を通して、純白の優しくて純粋な、しかも無防備な子ヒツジを威嚇する黒いオオカミとヒツジの群れを保護する牧人という対立的なこの譬えは、重要性をもってくるだろう。

そして、善悪二元論的隠喩を用いて説教する司祭たちや単純であるが明快なイメージを好む神学者たちによって集団的に援用されることになるだろう。[9]

ここで指摘されるように、キリスト教の信仰において狼はキリスト教と敵対するものとして示されてきた。こうした背景から、狼が異教の存在としてマリヤットの作品で描かれている理由が説明できるのである。

一方岡本の作品では、何度も「狼に取り憑かれる」という旨の発言が為される。次の引用はおいよが自身が狼となってしまう経過について語る場面である。

> おいよ　ありがたうございます。いえ、もう弱りは致しません、泣きは致しません。わたくしも一生懸命でございます。（涙を拭いて。）もし、そのあとをお聴きください。忘れもしない此の七月二日の晩でございました。わたくしが夜なかにふと眼をさましますと、表でわたくしの名を呼ぶやうな声がきこえます。不思議に思つて窓をあけて見ますと、暗い表に人らしいもの、忍んでゐる様子もございません。（その当時のありさまを思い出したように、眼を輝かしてあたりを見廻す。）よく聞くと、それは人の声ではなく、狼……狼の声でございました。
>
> モウロ　狼……。あなたはその声を聞いたばかりで、その姿を見ませんでしたか。

おいよ　姿はみえません、暗いなかで唯きこえるのは声ばかり……。それを聞いているうちに……。その時わたくしに魔がさしたのか、獣のたましいが乗憑つたのか、自分でも夢のやうに雨戸をあけて、ふら〳〵と表へ出ました。（立ちあがる。）どこかで狼の声がつゞけて聞えます。それがわたくしを呼ぶやうに聞えるので……。[10]

おいよは自身が狼となってしまうのは、狼の声に導かれて、「魔がさした」か、「獣のたましい」が乗り移ったかという要因で狼となってしまったと述べる。こうした、何者かの声に導かれて変身する、という描写は中島敦の『山月記』にも共通するものである。変身の系譜として、声に導かれて変容する、という過程はさまざまな変身に共通するものとして捉えられるかもしれない。しかし、ここで示しておきたいのは、おいよが自身の変身を意識的に行っているわけではなく、さらにそれが必ずしも悪魔的なものとは結び付けられていないことである。

おいよは「わたくしには獣のたましひが乗憑つてゐるのでござります。かうして女の姿はして居りますが、わたくしの心は怖ろしい狼になつて仕舞つたのでござります」と述べるように、ここで問題となっているのは、その心が狼のものへと変容しているということである[11]。また、「兎もかくも昼間は人なみの人間で、道理も人情も一通りはわきまへて居りながら、夜になると忽ち狼のこゝろに変って、人の肉を喰ひ、人の血を啜る……。こんな浅ましい因果な人間は、とても此世に生きてはゐられないのでござります」という言葉からは、取り憑かれた心を自分自身で制御することができていない様子が読みとれる[12]。

マリヤットの「人狼」における狼は、昼間においてもその怪異性があらわになっており、人を襲う行為を意識的に行っていた。それに比べると、おいよの変身は意識のみの変容でありそれが自身で抑えられなくなっているという「こゝろ」の問題となっていることが伺えるのである。こうした変容は日本における狼や獣憑きに対するイメージと無関係ではない。

日本における獣憑きについて、今井秀和は次のように述べる。

> 神や妖怪。死者などの霊魂はともかくとして、なぜ日本においては、動物が人に取り憑くのであろうか。しかも死んだ動物の霊のみならず、生きている動物の霊が頻繁に人に憑依するのはどういったわけか。
>
> 端的に言えば、特定の動物そのものが、ときに広い意味でのカミの一部に属していたからである。そこには、稲荷神における狐のほか、八幡神における鳩、春日明神における鹿など、神使（神の使わしめ）としての動物イメージとの相互影響もあろう。[13]

日本においても、狐憑きや狸憑きなどの伝承は数多くある。また、犬神なども犬の霊を人に取り憑かせる儀式であり、こうした獣憑き

と宗教的な意識は関連があるものである。今井は、日本においては動物の霊が憑くことが多いことを指摘し、そうした憑依は動物が神として扱われていた側面があるためであると述べる。獣の霊が憑くことというのは、神的な存在が人間の身体に降りてくることと同義のものだったのである。

また、菱川晶子は日本における動物図鑑の表記について調査し「「オホカミ」は「大神」からきており、「大神」はまた「山神」と呼ばれているのがわかる。今日もみられる狼を山の神とする伝承は、鎌倉時代にすでにあったことがこれによって知られる」ことを指摘する[14]。西洋において悪魔的なものとして捉えられていた狼は、日本的な風土のもとでは山の神の一種として理解されていた。おいよの変身は、神的な存在である獣の霊が人間の身体に降りてきている状態と考えられるのである。

このように考えると、マリヤットの人狼が、ハルツ山の精霊と繋がっていたように、おいよもまた神的存在と繋がっている状態としてみることができる。しかし、そのそれが自覚的なものであったのかどうか、また人間と狼のどちらが正体であったのかという点などは異なる。二つの変身は位相が違うものとして捉える必要があるのである。

4、異界との距離

「人狼」においては、怪異が起きる場所も、変異と無関係ではない。作品における舞台は怪異と深く関わっていると考えられる。マリヤットの「人狼」の舞台はハルツ山である。その場所について述べられているのが、以下の文章である。

> ここでまた言いそえるが、あの山のそこかしこには、怪しい魔物が住むという言い伝えがある。笑ってはいけない。嘘でない証拠は、これからのぼくの話でわかるのだ。猟師たちが恐れて、そうした場所へは近よらぬことにしていたのも、もっともといえるのである。
>
> そこもそうした場所のひとつで、ちょうどぼくたちの小屋の真上にあたっていた。松林のなかが、ぽっかりとひらけて、いわくつきの場所であることは、父にもすぐにわかったはずだ。それを承知ではいりこんだのは、そんな怪談めいた話を軽蔑していたものか、それともまた、追跡に夢中になったためか、どちらにしろ、白狼におびきよせられたかたちであることにはちがいない。[15]

この文章から、逃亡してきた家族の住んでいた場所が、山のなかであり、魔物が住んでいたことが語られている。これは岡本の「人狼」にも共通する要素として示される。

> お妙　いつかはあの山に天狗が出ると云つて、大騒ぎをしたことがありましたな。

おつぎ　それから山男が出て来て、子どもを攫つて行つたこともありました。

善助　むゝ。天狗の出たこともある、山男の出たこともある。なにしろ斯ういう山国には不思議なことが絶えないので困る。いや、飛んだ長話でお邪魔をしました。（立上る。）

岡本の「人狼」の時代は「桃山時代末期、慶長初年の頃」と述べられている。また場所についても「九州、肥前国。島原半島に近き山村」と設定されている。マリヤットの人狼と同様に山の中にある場で、怪異がおこる事が語られているのが分かるだろう。

こうした要素は共通しているものの、この二つの異界の諸相は異なったものであると考えられる。マリヤットの作品における舞台は人がほとんど立ち入らない場であるのに対し、岡本の作品は「山村」、つまり人が怪異の起こる場に住んでいることが示されているためである。ハルツ山は閉じられた異界であるのに対し、日本の山村は開かれた異界として存在していると考えられる。

藤井正雄は、日本人の世界観について以下のように述べる

能にみられる世界は生者の世界と死者の世界とが共存する世界であり、これは同時に日本人の世界観でもある。（中略）キリスト教に根ざす西欧世界においては聖―俗の分離が特徴であるとすれば、日本人の世界観は聖俗未分離が特徴である。（中略）神は人間を造った創造神ではなく、現実に生きている人間の延長線上に神・仏をおく図式に位置づけられることになる。人間は自然の一部であり、神となりうる可能体であることこそ、イレカエ論理にもとづく変身民俗を成立させたのである。[16]

ここにおいて主張されるのは日本人の世界観であり「生者の世界」と「死者の世界」が共存しているということ、つまり異界と日常の世界が入り混じる世界となっていることである。一方西洋はこうした同化が行われていないことが指摘される。この西洋と日本における世界観の違いは二つの「人狼」における異界の諸相とも繋がって来るものである。日本においては神的存在、怪異との共存が可能であるのに対し、西洋においては互いに反発するものとして示されるのである。

また、これは狼への変身した存在に対しても、一考することができる。マリヤットの「人狼」では、白狼は狼が正体であったことが示され、その位相はもともと異界に属する存在であったことが示される。しかしおいよにおいては、先ほど述べた通りおいよの身体に神的存在としても捉えうる獣の霊が降りてきている状態であると考えられる。つまりおいよは「生者の世界」と「死者の世界」が曖昧な山村において、その精神や肉体までもが人間と狼、異界と日常とを行き来している存在として捉えられるのである。

5、キリスト教との対立

さて、岡本の「人狼」においてはキリスト教が重要な要素として立ち現れる。では作中では、キリスト教はどのような評価を得ているのだろうか。キリスト教と日本的な世界観の対立が分かりやすく示されているのがおいよの家とモウロの家の対比である。以下はおいよの家の描写である。

> 藁葺屋根の二重家体にて、正面の上のかたに仏壇、その下に板戸の押入れあり。つづいて奥へ出入りの古びたる障子。下のかたは折りまわして古びたる壁、低き竹窓。前は竹縁にて、切株の踏み段あり。下のかたの好よきところに炉を切りて土瓶をかけ、傍らに粗朶籠などあり。庭には秋草など咲きて、上のかたには大竹藪あり。下のかたには低き丸太の柱を立て、型ばかりの木戸あり。木戸の外には石の井戸ありて、やや赤らみたる柿の大樹あり。うしろは田畑を隔てて高き山々、恰もこの村を圧するが如くに近くみゆ。[17]

ここでは、仏壇、土瓶などの小物が置かれ、古典的な日本家屋が描写されている。おいよのすむ場所が、こうした日本の風土になじんだものであることが示されているのである。一方で、モウロの住む家は以下のように描写される。

> 村はずれの一つ家。久しく空家となりいたれば、家内はすべて荒廃したりと知るべく、家内の大部分は土間にて、正面に古びたる板戸の出入口あり。左右の壁は頽おれ、下のかたの竹窓もくずれて、窓には紅葉しかかりたる蔦がからみて垂れたり。土間には炉を切りて、上のかたには破れ障子を閉めたる一間あり。正面の壁には聖母マリアの額をかけ、その前の小さき棚には金属製のマリアの立像を祭りてあり。よき所に手作りとおぼしき粗木あらぎの床几のごとき腰かけ二脚と、おなじく方形のテーブル様の物あり。下のかたの壁には小さき棚、それに多少の食器のたぐいを列べ、棚の下に水を入れたる手桶、束ねたる枯枝などあり。家の外には立木ありて、あき草高くおい茂り、うしろには山々みゆ。薄月の夜。[18]

ここでは腰かけやテーブル、マリア像などの西洋的なものが散在しており、おいよの家と対比するものと見てとれる。また、二つを比べて見ると一番注目がいくと考えられる正面に仏壇、マリアの額・立像が設置されており、この二つの空間の差異が宗教的な差異と関連が強いかのように示されている。舞台上のセットからは、仏教をもつ日本人とキリスト教を信じる異邦人との対立ともいえる構図を見出すことができるのである。

また、村人たちの態度もこうしたキリスト教について懐疑的なものである。おいよの夫である弥三郎は、おいよと話している際にキリスト教について「同意というでもないが、押切つて反対もしない

積りだ。神の力を頼むものは頼むがよい。人間の力をたのむ者は頼むがよい。どちらにしても、その狼を退治して、諸人の難儀を救うことが出来れば好いのだ。併しおれは武士の果で、今も狩人を商売にしているのだから、弓や鉄砲で働くのほかはあるまいよ。なにしろ、どんな相談があるか、これから直ぐに行ってみよう」と述べている[19]。ここではキリスト教に対する懐疑的な態度は見えないが、このすぐ後の場面ではキリスト教への考えを変容させている。それが次の文章である。

弥三郎　はゝ、おれは大丈夫だ。（刀の柄を叩く。）何が出て来ても、これで真二つ……。おれはその狼の出るのを待つてゐるのだ。村ではいよ〳〵切支丹の伴天連をたのんで、有難い祈りをして貰ふことに決まつたが、さつきも云ふ通り、祈祷は祈祷、おれは俺だ。おれは鉄砲かこの刀で、見ごとに狼を退治してみせるのだ。

お妙　（探るように。）狼のありかは判りましたか。

弥三郎　わかれば直ぐに退治に行くが……。そのありかが知れないので困るのだ。けふは一度も源五郎に逢はなかつたが、あいつも屹と狼のありかを探しているに相違ない。おれも今夜は鉄砲を持ち出して、夜通し村中を見廻つてあるく積りだ。みんなが無暗に切支丹を有難がつてゐるのを聞くと、おれは何だか腹が立って来た。どうしてもあの狼をおれたちの手で仕留めて、切支丹の坊主が偉いか、おれ達が偉いか、この腕をみせて遣らなければならないのだ。[20]

前半の台詞では、おいよと話していた意見を繰り返し述べているにも関わらず、その後には自分達の力とキリスト教の力のどちらが偉いかを競うような思考へと変化している。これは第一幕の出来事であるため、物語の序盤においてすでにキリスト教との対立が見て取れるのである。こうしたキリスト教への懐疑を示すのは、弥三郎だけではない。同様に村で猟師を行っている源五郎も「異国の坊主なぞに何が出来るものか。おれは不断から切支丹は大嫌ひだ。兄さんのいふ通り、かうなつたら意地づくでも、おれたちの手で退治しなければならない」[21]と述べる。村においてキリスト教を信奉する人々の話は出てくるがそうした人物は作中には登場しない。こうした弥三郎や源五郎の示すキリスト教への敵対心は、キリスト教と村の宗教的意識との対立として見ることができるのである。

6、おいよと信仰

弥三郎や源五郎など、村の人間はキリスト教と対立する存在として示されている。山村とキリスト教が、同化できないものとして示されていたのだが、この二つの境界を行き来する存在として示されるのがおいよである。おいよは、作中でサンタ・マリアの像をもらい、またキリスト教への関心を持つ様子が伺える。おいよが以前からキリスト教への関心を持っていたことは、次の文章から伺える。

モウロ　（笑ましげに。）わたくしはあなたを識つてゐます。このあひだ庄屋さんの家で、わたくしが説教をしました。その時に、あなたは庭の大きい木のかげに立つて、遠くから聴いてゐました。違ひますか。

おいよ　はい。おつしやる通りでござります。

モウロ　わたくしの説教、わかりましたか。

（おいよは無言で俯向いてゐる。）[22]

これは、おいよがモウロに自殺を止められたすぐ後の会話である。ここではおいよが以前にモウロの説教を聞いて来たことが明かされる。作中において、おいよがキリスト教への接近を見せる唯一の人物として示されるのである。しかし、おいよがその教えがどのようなものか、分かっていたかどうかは無言によって示されない。また、キリスト教がおいよを救ったのかどうかも明らかにされないのである。

おいよはその過程において、何度もキリスト教への懐疑と信仰を行ったり来たりしている様子が伺える。「あの、わたくしのやうな者でも……。（モウロの前にひざまづく。）ほんたうに救はれませうか」[23]と何度も口にする一方で、モウロの教えに「ありがたうござります。（思はず手をあはせる。）」[24]という様子を見せ、「ほんに有難い伴天連様……。あゝいうお方のおそばに付いていられるのは、お前のお仕合せでござりますな」と伴天連についての印象を露わにする。おいよのキリスト教に対する態度が明快に表れてるのが、おいよが狼に変身する場面である。

（おいよは慌てゝ縁にかけ上り、懐中より彼のマリアの像を取出して、行燈の火に照らして見る。）

おいよ　（マリアの像を押頂く。）サンタ、マリア……。サンタ、マリア……。（やがて又、表をみかへる。）えゝ、まだ聞える。まだ聞える。（今度は無言にて、像を押頂きながら念ず。）まだ聞える……。やつぱり聞える……。わたしの信心が足らないのか。伴天連の教えが詐りか。ええ、聞えないでくれ、聞えないでくれ。えゝ、もうどうしたら好いか。（像を置いて、両手で耳をおさえながら俯伏す。）えゝ、これでも聞える……。

（おいよは再びマリアの像を取りながら、物に引かるゝように縁を降りる。）

おいよ　えゝ、今夜もやっぱり……。いや、行つてはならない。出てはならない。これほどにサンタ、マリアを念じても……。神様は救つて下さらないのか。わたしの罪が深いのか。（持つたる像を地に投げ捨て、砧の前へゆきて槌を取る。）えゝ、執念ぶかい狼め。鬼め、悪魔め、畜生め。啼くな。啼くな呼んでくれるな。

（おいよは眼にみえぬ物を追ひ払はうとするように槌をふりまはし、髪もみだれて姿もしどけなく、筵の上に狂ひ倒れる。奥よりお妙出づ。）[25]

ここでは、サンタ・マリアの像に口に出して祈ってみたり、無言で祈ったりという行動をとる一方で、「伴天連の教えが詐りか」と述べたり、マリア像を投げすてたりしている。おいよがキリスト教に対する懐疑と信仰との間を彷徨っている様子が伺えるのである。

変身の様子においてもおいよは、神的存在と人間との間を彷徨っているということを述べてきたが、他の人物に見られなかったキリスト教に対する信仰と不信という領域をも行き来している存在として見ることができるのである。

7、マリヤ像とおいよ

ここまでの論を整理すると、おいよは二つの対立する概念や存在を行き来する存在として示されていることが分かる。狼と人、神的存在と人間、異界と日常、キリスト教と山村における信仰……。このように違う領域に越境し、その狭間を彷徨う存在として切支丹の信仰においてはもう一つのものを見出すことができる。マリア像である。マリア像は、イエスの母であるマリアが、聖母として信仰されるようになったために様々な教会で信仰のモチーフとされるようになった。岡本綺堂の作品においては、マリア像は作品のそこかしこに登場する。モウロの家には二つのマリア像が飾られており、おいよが変身を防ぐために縋るのもマリア像である。また、狼となったおいよが絶命する際には、おいよのそばに捨てて来たはずのマリア像が転がっている。以下は物語の最後の場面である。

（おいよは答へず。正吉は蝋燭をさし付けてモウロの顔をみれば、モウロは悲しげに頭を掉りて、もういけないと云ふ。そのうちに正吉は地に落ちたるマリアの像を拾ひあげて見せる。）

正吉　マリア様の像には血が付いています。おいよさんが持つて来たのでせうか。

（モウロは無言にて、その像を把つてながめている。下のかたより田原弥三郎は銃を持ちて出づ。）（中略）

モウロ　（マリアの像を取る。）悪魔は清いお姿に血を塗りました。

正吉　すぐに洗いましょうか。

モウロ　いや。この血の自然に消えるように、我々は祈りを続けなければなりません。今夜は眠らずに……。

正吉　はい。

（モウロは像を押頂きて元の棚に祭り、正吉とテーブルに向い合いて、再び聖書を繙く。月のひかり。梟の声。）[26]

先程の投げ出されたマリア像を見ても、岡本の「人狼」におけるマリヤ像はおいよと換喩的に示されていると考えられる。おいよが狼に変容する際にはマリア像が投げ棄てられ、その後は狼となったおいよと結びついていたかのようにおいよの近くに出現する。また、モウロの「悪魔は清いお姿に血を塗りました」という言葉は、おいよのこととしても捉えられる。おいよもまた撃たれたことによって血を流しており、モウロはおいよが悪魔に憑かれていたと述

べていたためである。

切支丹においては、マリア像は大きな役割を持っている。迫害の最中、マリア像はマリア観音など、他宗教と混淆されながら信仰され続けた。山折哲雄は「歴史的に制作された聖なる木偶としての釈迦像やマリヤ像が、時代を超えた民衆の欲望や祈願を吸収することによって犯しがたい不気味な生き物に転生した」と述べる[27]。マリア像は様々な領域を行き来することによって、別のものへと変身を遂げたのである。

これはマリア像が、日本という地に渡り、様々な受容の器として機能したことが一つの要因である。「人狼」の描写に注目すると、実はおいよも、舞台となる山村に移動してきた人物であることが分かる。おいよは自身の系譜について次のように述べる。

おいよ　それには先ずわたくしの身の上からお話し申さなければなりません。わたくしの夫は田原弥三郎と申しまして、以前は秋月家に仕っへた侍でござりましたが、八年以前に仔細あって浪人いたしまして、お妙といふ妹と妻のわたくしと……。まだ申上げませんでしたが、わたくしの名はいよと申します。

（モウロはうなづきながら、おいよを抱き起して元の床几にかけさせ、自分も元の席に戻る。）

モウロ　わかりました。あなたの名はおいよさん。そのあなたと、あなたの夫と、その妹と……。三人の家族ですな。

おいよ　はい。夫は浪人の身となりましたので、その後は夫婦兄妹三人がここに引籠りまして、夫は狩人、わたくしは近所の娘子供に手習や針仕事などを教えまして、何事もなく月日を送つて居りますうちに……。まあ、なんという因果でござりませう。わたくしに不図おそろしい魔がさしまして……。（云いかけて、又泣き入る。）

ここからはもとは違う地で暮らしていた弥三郎、おいよ、お妙の三人が、この地に越してきたことが読み取れる。これはマリヤットの「人狼」のクランツ一家と重なる描写である。もとは領主につかえていた人物であり、なんらかの原因によって山村に逃げ込むという共通点がある。おいよもマリア像と同様に、移動してきた人物であり、そもそもは異邦人であったという側面がある。様々なものを越境していく点でもおいよとマリア像は重なっている。この作品においておいよは様々な境界を越え得る人物であり、その描写が切支丹におけるマリア像と重なっていることが指摘できるのである。

8、おわりに

岡本綺堂の「人狼」はフレデリック・マリヤットの「人狼」から影響を受けて書かれた作品である。しかし、その人狼の描き方は原典と異なっており、日本という風土との混淆が意識されて作られていたものであると考えられる。岡本の書く人狼は、神的存在と人間との領域を行き来するものとして描かれ、さらにキリスト教との交

わりも見られる。おいよは異界を彷徨う存在であり、作品においては切支丹におけるマリア像と換喩的に示される人物として理解できるのである。

こうした神的存在と変化の諸相について、山折哲雄は「歌舞伎における「変化」の舞踊もまた、怨霊の働きをそのなかに封じこんで民衆の拍手喝采を博した」と述べる[28]。歌舞伎は能から発展を遂げて来たものであるが、山折はその二つは異なっているとし「怨霊は、能の演出においてわれわれが教えられているように、鎮魂させられることによって超空間へ身を退いていくのではなくて、役者の肉体にのり移って己れの欲望をとげようとしている。そこにはおそらく、美を沈殿させた中世的宗教意識から、宗教を沈殿させた近世的美意識への転換、つまりは能から歌舞伎への転換がみられるのであろう」と述べる[29]。

岡本綺堂の「人狼」においては、狼が人に乗り移るという形態がとられていることは本論で述べて来たとおりである。また、この作品において宗教的な意識は表面にはっきりと示されるわけではなく、「人狼」という怪異の枠組みに焦点が当てられている。こうした霊的なものの描き方は、岡本が得意とした歌舞伎が持つ形式から得たものであるのかもしれない。「人狼」という西洋の怪異と日本的な霊的な存在が融合した作品が岡本綺堂の「人狼」である。

（にしおか　さとみ・人文学専攻）

注

1 平井照敏「近代南蛮文学の出発」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』（1）、1993年7月、65ページ
2 東雅夫「解題」、東雅夫編『岡本綺堂妖術伝奇集』2002年3月、学習研究社、816ページ
3 紀田順一郎『幻想と怪奇の時代』2007年3月、松籟社、229ページ
4 平井呈一「解説」、『怪奇小説傑作集』1969年3月、東京創元社、369ページ
5 前掲書、369ページ
6 岡本綺堂「人狼」『舞台』1931年3月号、24ページ（引用は初出に拠った。以下、本文と記載。）
7 フレデリック・マリヤット「人狼」中村能三・宇野利泰訳『怪奇小説傑作集2』1969年3月、東京創元社、202ページ
8 小野泰博「人格返還と憑依体験」、櫻井徳太郎・小野泰博・山折哲雄・宮家準『変身』1974年10月、弘文堂、106ページ
9 ジル・ラガッシュ、高橋正男『オオカミの神話・伝承』、1992年4月、大修館書店、30～31ページ
10 本文、15ページ
11 本文、14ページ
12 本文、16ページ
13 今井秀和「憑依する霊獣たち」、伊藤慎吾編『妖怪・憑依・擬人化の文化史』2016年2月、笠間書房、108ページ
14 菱川晶子『狼の民俗学』2009年3月、東京大学出版会、200ページ
15 フレデリック・マリヤット、前掲書、185～186ページ
16 藤井正雄「解題」、櫻井徳太郎・小野泰博・山折哲雄・宮家準『変身』

17 本文、1ページ
18 本文、14ページ
19 本文、7ページ
20 本文、10ページ
21 本文、11ページ
22 本文、13ページ
23 本文、17ページ
24 本文、17ページ
25 本文、22ページ
26 本文24～27ページ
27 山折哲雄「霊と肉の変身」、櫻井徳太郎・小野泰博・山折哲雄・宮家準『変身』、1974年10月、弘文堂、138～139ページ
28 前掲書、138ページ
29 前掲書、139ページ

1974年10月、弘文堂、237～238ページ